

Eureka IX

六年制通信 No.27 令和3年12月10日(金)号

ナースログ

人間は自然を観察することによって、その森羅万象から人生の真実や万物の根源を見出そうとしてきました。万物の根源は何か、ギリシアの昔から「火」だ、「数」だ、「水」だと議論は盛んだったようです。「火」だと言ったヘラクレイトスは「万物は流転する」と考えました。これ、面白いですね。万物の根源は「水」だと言ったタレスなら、全てのものは「ひと所にとどまらず流れていく」と考えても不思議ではないでしょうが「火」ですからね。また、彼は流転しないものはロゴスであるとしています。ロゴスは「言葉」とか「学問」、現代英語に **logic** とか **~logy** として残っています。

人生を水の流れに例えているのは、日本ではもちろん『方丈記』ですね。「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず」(岩波文庫に準じて「河」にしておきます)、どんなものでもひと所にずっととどまることはない、常に変わっていくという一種の無常観ですが、これを河の水は滔々と流れ絶えることはない、私たちの命も次の世代へと受け継がれていく、従って私たちの命は不滅であるといった解釈をする人もいます。こういう古典は後世のどのような解釈をも許されるでしょうから、君たちも好きなように考えていいと思います。私は、いいことも悪いこともいずれ流れていく、どんなに忘れがたい喜びも、どんなに笑えるほどの悲しみも、いつか必ず過ぎ去っていく、そしてまた新しい喜びとか悲しみに出会う、それらもまた…そう解釈しています。

老子は「上善水の如し」と言っています。どうして知っているかという、大きい声では言えませんが、実はこういう銘柄の日本酒がありましてね、私好きなんです、それで昔ちよっと調べたわけです。老子の言うには「最上の善とは水のようなものだ。水は生きとし生けるものに平等に恵みを与え、しかも争わない。人の嫌がる低いところに流れる」と。そこから私たちも身を置くには低いところでよい、考えも奥深いものがよい、と話を広げています。鴨長明の「無常観」とは少し違いますね。

森に目を向けると、昔読んだ開高さんの本に面白いことが書いてあったので紹介しましょう。開高健はもうあまり読まれないのだろうと思っていたら、最近『オーパ』が復刻されていますね。文庫ですけど。私は釣りに全く興味がないので、ほとんど写真集とっていいこのエッセイ集を持っていませんが、開高さんの文章は好きですね。何でもいいので、君たちにも読んでほしいと思っています。彼はある時から釣りにハマるのですが「小説家というのは基本嘘つきである。釣り師もまたホラ吹きである。私は嘘つきからホラ吹きになったのであるが、これは出世したのか降格したのか…」などと面白いことを言っていました。そんな開高さんがアラスカに行ったとき、まだ人の

入ったことのない森をたくさん見るわけです。これを「斧の入ったことのない森」と表現していました。森は土が見えていない。表面は緑の苔か何かでおおわれている。つまり乾かない。豊かな森です。そんな中に、風で倒れた大きな木がある。木としての寿命を終え倒れたままの、一見非常に無駄なように見えるその木を現地の人は「ナースログ」というのだと、そう開高さんは書いています。ログは log、木です。ナースは nurse、看護師さんです。動詞では「看護する、大事に育てる」の意味ですから nursery school で「保育園」です。要するに、森を看護する、森を大切に育てる木のことをナースログというわけです。倒れた木に苔が生え微生物も繁殖する、昆虫がやってくる、それを捕まえに小動物が来る、それを狙って鳥が来る、やがて木は土にかえり森を豊かにする。こういう話をした後、開高さんは「これは自然に無駄なもの一つもないという例だ」とし、さらに続けて私たち一人一人のナースログとは何だろう、と問いかけています。無駄なように見えるけれど、無駄どころか逆に非常に大切なもの、人生を豊かにしてくれるもの、そんなものがたくさんあるのではないか。自分では気づかないだけではないか。私たちを豊かにしてくれる、この場合は私たちの精神ということでしょうが、知らないうちに心を看護してくれている「無駄なこと」がある、ということは人生に「無駄なこと」などないのではないか、それが開高さんの言いたかったことだろうと私は思います。アラスカという大自然の中で森の中に倒れた、無駄に見える木に自分の人生を投影したのでしょうか。(ちなみに「投影する」は英語で project といいます)

考えてみれば、これは自分の人生に無駄だなどと判断し、あれこれ切り捨てるのは小賢しいことですよ。その判断が正しいと、誰にも言えないのですからね。

今週のおすすめ

・大久保房男 『日本語への文士の心構え』 (アートデイズ)

著者は大正の生まれ。講談社の月刊文芸誌「群像」の編集長を務め、理想の文士像をはっきりと持っていた人です。流行作家など全く認めず、文士の書く言葉の端々にまで「いちやもん」をつけると、阿川弘之級の作家にも恐れられていました。陰で「鬼」と呼ばれていたそうです。その鬼が日本語について書いた本、面白くないわけがない。私は読みながら何度も膝を叩いて「その通り」と声も出ました。君たちにも是非読んでほしい。大変読みやすい本ですよ。

終りの方に、文章を書く上で守るべき三つの戒律という話があって、これ知らなかったなあ。「常套句を使うな」「オノマトペを使うな」「記号を使うな」だそうです。記号とは「？」も含まれるわけですが、では「食べるか」を疑問形を取らずに語尾を上げて「食べる」ということがあるけど「食べる？」と書かずにどう表現すればいいのか。これを普通に「食べる」と書けば、食べるかどうかを相手に聞いているとは読者にわからないものね。これに大久保さんは解答を二つ与えています。本書の p.128 で確認してください。大久保さんは私より 40 歳も上なのですが、これくらい年上の人の言われることの方が私には同感できます。やっぱり考え方が古いんでしょうね、きっと。

BGM は The Beatles の Michelle でした…。